

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00199

研究課題名（和文）15世紀ネーデルラントにおける聖心イメージ

研究課題名（英文）The Imagery of sacred hearts in the Netherlands in the 15th century

研究代表者

蜷川 順子（Junko, Ninagawa）

関西大学・東西学術研究所・客員研究員

研究者番号：00268468

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：西欧における聖心イメージの登場は、現存資料に基づくなら、シスマを終結させたコンスタンツ教会議の頃だったと考えられる。コンコミタンス（併存説）が正統となり、血でもあり肉でもある聖心の象徴性が重視された。また、教会の存立を強固にする七秘跡の制度化において、旧約の七秘跡の制度化がルネサンスの古代研究に刺激を受けたことや、秘跡をもたらす聖霊（羅：スピリトゥス）の原語に、大気や風を意味する古ギリシア語のプネウマ（ヘブライ語のルーアハ）があることがあきらかになった。これらの観念はただちにネーデルラントにもたらされ、聖心崇敬がすすむと同時に、ロヒール周辺で聖母の聖心についても新たなイメージ化がなされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

15世紀の初期ネーデルラント絵画は、キリスト教の目に見えない宗教的観念を写実的な現実世界に仮託することで、難解な教義を一般の人々にとって把握しやすいものとしてきた。そうした中でハート形は広く親しみやすいものとして人気を博し、強い影響力をもった。しかしながら、視覚イメージの常として曖昧な多義性を有するため、背後にある宗教的、政治的、社会的、経済的ファクターによるイメージ・リテラシーの変動を理解しなければ、その歴史的重要性を見過ごしかねない。本研究は、古今東西のイメージ受容の諸相において、看過すべきではない多義性や重層性を例示する点で、学術的・社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：Extant sources suggest that the visual imagery of the Sacred Heart appeared in Western Europe around the time of the Council of Constance, which brought the Schism to an end. The idea of concomitance became the orthodoxy, and the symbolism of the imagery of the Sacred Heart (imagery that includes both blood and flesh) began to be cherished. At the same time, in the institutionalization of the seven sacraments that might be able to sustain the Church, it was under the inspiration from the studies on antiquities in the Renaissance era that the seven sacraments of the Old Testament could also be arranged, and the original word for the Holy Spirit (Latin: spiritus), which brings the sacraments, was the Old Greek word pneuma (Hebrew: ruach), meaning "air" or "wind." These ideas were immediately brought to the Netherlands, where the veneration of the Sacred Heart was promoted and a new image of the Virgin's Sacred Heart was created around Rogier van der Weyden.

研究分野：西洋美術史

キーワード：聖母の聖心 ハート形 ネーデルラント 見えるものと見えないもの 風の表象 ロヒール・ファン・デル・ウェイデン 七秘跡 聖霊

1. 研究開始当初の背景

ハート形で世俗の愛を表わす慣習は13世紀のヨーロッパで始まったが、宗教的崇敬の場で神の愛などを表わすハート形は聖心と呼ばれ、15世紀初頭のコンスタンツ宗教会議前後に登場したと思われる。ネーデルラントは聖心崇敬が盛んだった地域だと考えられるものの、その詳細はあきらかになっていない。本研究では、「フレマールの画家」あるいはロヒール・ファン・デル・ウェイデン(1399/1400-1464)周辺の画家による《受難の道具をもつ三天使のいる磔刑のキリスト》(ブリュッセル王立美術館)を考察の中心に据えて、これを「聖母の聖心」崇敬に関わる早い作例とみなす仮説をたて、15世紀ネーデルラントにおける聖心崇敬の実態をあきらかにする。

2. 研究の目的

盛期中世のキリスト世界では、華麗な典礼具を多用した外的崇敬形態が主流であったが、中世末にあたる15世紀には、内的で精神性を強めた聖心崇敬がとくにネーデルラントで盛んになった。本研究は、ネーデルラント美術において従来あまり指摘されてこなかった聖心関係の図像とくにロヒール・ファン・デル・ウェイデン周辺で制作された空中に浮かぶ磔刑図に注目し、それが従来考えられていたような恩寵の座の表現というより、聖母の聖心に関わることをあきらかにする。ここから、イエスの聖心だけではなく、聖母の聖心もほぼ同じ時期に登場していたと仮定し、15世紀ネーデルラントにおける聖心崇敬の実態をあきらかにする。ネーデルラントは、シトー会の聖ベルナルを中心としたラテン文化と、ヘルフタの修道女たちの幻視体験などを包含するゲルマン文化が交差する地理的、文化的条件を備えており、両文化圏への波及経路も合わせて解明していく。

3. 研究の方法

文献資料、イメージ資料、背景となる歴史的事象の考察と分析、これらを統合することで、15世紀ネーデルラントにおける聖心崇敬の実態を論じる。

文献資料に関しては、直接関係するものは多くないが、ヘルフタをはじめとする修道女たちの言説や祈禱文から、聖母の聖心の描写と思われる文言を抽出する。また、コンスタンツ宗教会議関係の文献資料から、とくにコンコミタンス擁護や七秘跡に関する文献を蒐集する。とくに「目に見えないもの」に「目に見える形」を与えるという観点は、聖心、コンコミタンス、七秘跡に共通するので、これらを重点的に考察する。

イメージ資料としては、15世紀のハート形に関する木版画を蒐集し、銘文読解に関してクリスティーナ・ヴェーバー氏(ボン大学)の協力を得て、民間に広がっていた聖心信仰の実態をあきらかにする。

シスマの終結やビザンツ帝国の終焉に伴う古代思想の西側への流入により、ルネサンスが進展することで加速した近代のキリスト教人文主義の視点から、聖心崇敬の展開を分析する。最終的に、からの成果を統合して、15世紀ネーデルラントにおける聖心崇敬の実態を論じる。

4. 研究成果

ハート形に関しては、2018年に開催したシンポジウムの子稿集『ハート形のイメージ世界 - 見えるものと見えないもの』(2021年、晃洋書房)を刊行し、これに関連した論文発表などを通して、西欧における聖心イメージの登場は、現存資料に基づくなら、シスマを終結させたコンスタンツ宗教会議の頃だったと仮定した。この会議では、フス派らのウトラキズム(両種説)を退けるコンコミタンス(併存説)が正統となり、血でもあり肉でもある聖心イメージの象徴性が重視された。また同時に、教会の存立を強固にする七秘跡の制度化において、ルネサンスの古代研究に刺激を受けた旧約の七秘跡や、秘跡をもたらす聖霊(羅:スピリトゥス)の原語に、大気や風を意味する古ギリシア語のプネウマ(ヘブライ語のルーアハ)があることがあきらかになった。

こうした、スピリトゥスに関する古代回帰と自然起源を指摘した翻訳書バーバラ・バート『風のイコノロジー』(2022年、三元社)を刊行し、それに基づいて国際シンポジウム『風のイメージ世界』(2022年3月)を実施した。その成果として、『風のイメージ世界』(2023年、三元社)を監修・刊行した。また同書で「ロヒール・ファン・デル・ウェイデンの風の表象」(149-175頁、WEB英語版)を発表して、ロヒールの斬新な聖霊の可視化に鑑み、15世紀ネーデルラントにおける聖心イメージの登場もまたロヒール周辺にもある可能性を高めた。ロヒールの師である「フレマールの画家」周辺では、本研究課題である作品(ブリュッセル王立美術館)が制作されており、第76回美術史学会全国大会で「十字架と聖母の聖心 - 「フレマールの画家」周辺で制作された《受難の道具をもつ三天使がいる十字架のキリストをめぐって - 》」として発表した。本成果は現在刊行準備中である。

七秘跡に関しては、17世紀転換期前後にイエズス会によって日本にもたらされた茨木市立文

化財資料館蔵の銅版画シリーズ研究において、16世紀における意味を考察し、『近世初期にキリスト教宣教師がもたらした銅版画の役割』として出版した。また、聖心に代表される、見えないものの見えるものへの仮託として、聖母、風の表象、七秘跡の制度化などを繋げる自然や風景表象を扱った『領域のフレーミング』（2024年3月、関西大学出版部）を刊行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 蛭川 順子	4. 巻 73(3)
2. 論文標題 ヒエロニムス・コックと「四方の風」：小風景版画シリーズの出版をめぐる	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 關西大學文學論集	6. 最初と最後の頁 183～207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32286/0002000683	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 蛭川 順子	4. 巻 73(1-2)
2. 論文標題 クラウドイオ・アッカヴィーヴァについて：茨木銅版画シリーズの発注者に関する試論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 關西大學文學論集	6. 最初と最後の頁 21～39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32286/0002000469	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 蛭川順子	4. 巻 5
2. 論文標題 近世初期にキリスト教宣教師がもたらした銅版画の役割 - 茨木市立文化財資料館蔵 七秘跡と七美德がある主の祈りの七請願 の場合	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 DNP文化振興財団学術研究助成紀要	6. 最初と最後の頁 164-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 蛭川順子	4. 巻 72(4)
2. 論文標題 浮遊する十字架 - 15世紀ネーデルラント美術における	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 關西大學文學論集	6. 最初と最後の頁 121-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32286/00027994	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 蜷川順子	4. 巻 72(1-2)
2. 論文標題 ヒエロニムス・ポスの二人のヨハネ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 關西大學文學論集	6. 最初と最後の頁 161-187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32286/00027283	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 蜷川順子	4. 巻 71(4)
2. 論文標題 茨木市立文化財資料館蔵『七秘蹟と七美德がある主の祈りの七祈願』の受容空間	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 關西大學文學論集	6. 最初と最後の頁 137-170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32286/00026177	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 蜷川順子	4. 巻 71(1-2)
2. 論文標題 ヘルフタ女子修道院と聖心崇敬：聖母の聖心への造形的アプローチへ向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 關西大學文學論集	6. 最初と最後の頁 31-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32286/00025435	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 蜷川順子	4. 巻 54号
2. 論文標題 風景表象と領域のフレーミング その意義と可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 關西大学東西学術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 159-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32286/00023731	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 蜷川順子	4. 巻 41
2. 論文標題 ボンベオ・パトーニのイエスの聖心	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術フォーラム2 1	6. 最初と最後の頁 113,118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 蜷川順子
2. 発表標題 ブリュゲルのイタリア旅行再考
3. 学会等名 2023 年度 第15回 東西学術研究所 研究例会 【風景表象研究班】風景表象の比較文化史的研究 その5
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 蜷川順子
2. 発表標題 十字架と聖母の聖心 - 「フレマールの画家」周辺で制作された《受難の道具をもつ三天使がいる十字架のキリスト》をめぐって -
3. 学会等名 第76回美術史学会全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 蜷川順子
2. 発表標題 ブリュゲルの風景 - 森洋子著 『ブリュゲルと季節画の世界』 (岩波書店) を手がかりに
3. 学会等名 2022 年度 第11回 東西学術研究所 研究例会 【風景表象研究班】風景表象の比較文化史的研究 その1
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Junko Ninagawa
2. 発表標題 Visual instructions for performing rituals - images of sacraments
3. 学会等名 HNA conference Den Haag-Amsterdam, 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 蜷川順子
2. 発表標題 ロヒール・ファン・デル・ウェイデンの風の表象
3. 学会等名 国際シンポジウム「風のイメージ世界」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 蜷川順子
2. 発表標題 野生の風景表象 近世初期の西欧を中心に
3. 学会等名 関西大学東西学術研究所創立七十周年記念シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 蜷川順子
2. 発表標題 領域のフレーミング「風景表象への新しいアプローチ」
3. 学会等名 2020年度 東西学術研究所 研究例会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 須藤温子監著、木村三郎・植月恵一編編著、伊藤博明・斉田正子・徳井淑子・蜷川順子著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 ハートの図像ー共鳴する美術、音楽、文学	

1. 著者名 蜷川 順子編著訳、メルテム・オズカン・アルトゥノズ、吉田 雄介著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 関西大学出版部	5. 総ページ数 402
3. 書名 領域のフレーミング	

1. 著者名 野間晴雄編著、岡絵里子・嶋中博章・西田正憲・蜷川順子・林倫子著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 関西大学東西学術研究所	5. 総ページ数 181
3. 書名 風景表象の比較史	

1. 著者名 蜷川順子監著訳、倉持充希、富岡進一、長岡龍作、野間晴雄、ハシーブ・アフマド、フラッド・イオネスク、ゾルタン・ソムヘギ、バーバラ・パート著、足立恵理子、天王寺谷千裕、山形美有紀、森口麻里絵訳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 276
3. 書名 風のイメージ世界	

1. 著者名 蜷川順子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 関西大学出版部	5. 総ページ数 388
3. 書名 祈りの形にみる西洋近世 茨木の銅版画シリーズ 七秘跡と七美德がある主の祈りの七請願	

1. 著者名 バーバラ・パート著、蜷川順子訳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 297
3. 書名 風のイコノロジー	

1. 著者名 陳来、高宮利行、朝治啓三、吾妻重二、井上克人、大谷渡、嶋中博章、沈国威、関屋俊彦、陳路、二階堂善弘、西本昌弘、蜷川順子、原田正俊、藤田高夫、増田周子、松浦章、三村尚彦、毛利美穂、高橋美帆、陶徳民、和田葉子、フレッド・E・アンダーソン、パトリック・P・オニール、王テイ	4. 発行年 2022年
2. 出版社 関西大学東西学術研究所	5. 総ページ数 576
3. 書名 関西大学東西学術研究所創立七十周年記念論文集	

1. 著者名 蜷川順子編訳、テオドーロ・デ・ジョルジオ、ヴィトル・テイシェイラ、パトリック P. オニール、カトリーン・サンティング、塚本磨充、秋庭史典、杉山卓史、ジェームズ・カーワン訳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 250
3. 書名 ハート形のイメージ世界 見えるものと見えないもの	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際シンポジウム「風のイメージ世界」	開催年 2022年～2022年
------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
オランダ	フローニンゲン大学			
ポルトガル	ポルトガル・カトリック大学			
米国	ノースカロライナ大学チャーチヒル校			
イタリア	サレント大学			
ベルギー	ルーヴェン・カトリック大学	王立美術館、ブリュッセル	シント・サルヴァドール聖堂	
トルコ	アンカラ大学			
ドイツ	ボン大学			
スペイン	ラザロ・ガルディアアーノ美術館			